

# 障子を開けよ

◇9

## アイデア障害が原点

愛知県額田郡額田町の山間部にある自宅わきの小さな小屋。暖房器具一つなく、すき間風が冷たい。この殺風景な作業場が、加藤源重さん(66)の工房だ。旋盤、バーナー、ハンマー…。金属品を加工、製作する道具はみなそろっている。ないものといえば、加藤さんの右手五本の指。

今から十年前。愛知県岡崎市内の繊維工場で機械工として働いていた加藤さんは、機械の点検中、利き腕の右手を巻き込まれ、親指の付け根以外をすべて失った。この不慮の事故をきっかけに、当時、五十すぎの加藤さんが「発明」という第二の人生を歩む。

「もう一度、好物の刺し身をほしで食べたい」。事故から一年半。こんな募る思いが最初の発明につながった。名古屋の大病院を回り、右手の補助具製作を依頼する。

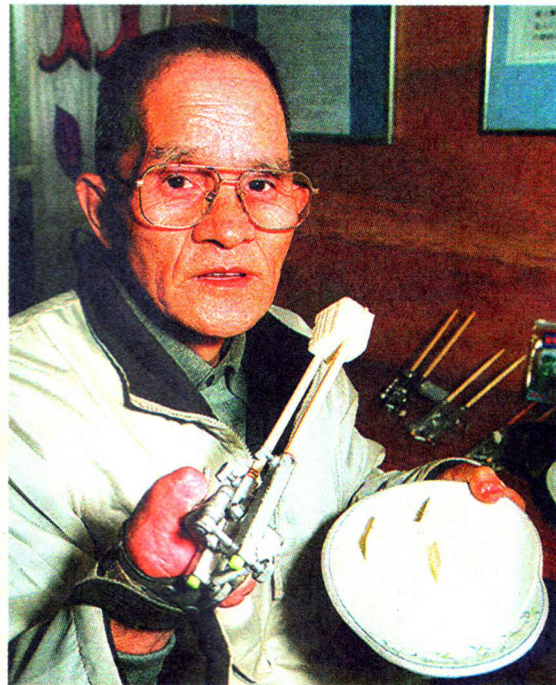
× × × × ×

### 発明人生

この連載についてのご感想や意見、情報をお寄せください。〒460 8511 名古屋市中区三の丸1-6-1、中日新聞経済部。ファクス=052 (221) 0913。Eメール=keizai@chunichi.co.jp

中卒で、まともな製図を学んだことはない。機械工時代の勘を頼りに、浮かんできたアイデアを左手で大学ノートに書きなぐった。床に座り、右腕と左のふともも

頼する。だが「指もないの間にドライバーやはんだに何をほかなことを」と技師からあっさり断られた。「作りもしないで、できないと決め付けるなんて」。悔しさのあまり「自分で作ってやる」と決心する。工業高校払い下げの古い旋盤を自分で購入し、労災手当も会社を辞めることで打ち切った。製作に専念するためだ。



「作りもしないで、できないと決め付けるなんて」。悔しさのあまり「自分で作ってやる」と決心する。工業高校払い下げの古い旋盤を自分で購入し、労災手当も会社を辞めることで打ち切った。製作に専念するためだ。

に運べた。

× × × × ×

この発明が雑誌などで紹介されると、障害者が補助具の製作を求めてきた。「社会福祉」というような大それた考えはなかった。自分が不自由だから、何とかしたい、と言ってくる時が一番つらい。積み重ねた発明は六十件以上。十八件の特許を持ち、既にくつかが福祉器具メーカーを通じ、製品化されている。

昨年九月、早稲田大学で「モノ作りの原点」と題し、理工系学生約四百人の前で講演。福祉ロボット専攻の学生が「独り善がりでした」とうなだれた。

三河地方のボランティア仲間と一年前「福祉工房あいち」を立ち上げた。障害者や高齢者の自立を促す補助具を低価格で製作する。「障害者は自分で行動したいんです。だれの気兼ねもなしに…。その願いを少しでもかなえたい」。市井の発明家の目が輝いた。

＝終わり

(この連載は寺本政司、山下雅弘、戸谷正一が担当しました)

最初に発明した、はしの補助具で豆腐をつまむ加藤さん。このアイデアはメーカーを通じて製品化されている＝愛知県額田町の工房で

第一部 深化するモノ作り

メモ

**障害者の就業** 厚生労働省によると、日本の在宅身体障害者数は1996年調査で、18歳以上が293万3000人、18歳以下が8万1600人。18歳以上のうち、30.1%に当たる84万5000人が就業している。同省職業安定局が昨年11月に発表した「身体障害者及び知的障害者の雇用状況」によると、民間企業(常用労働者数56人以上規模)の平均実雇用率は1.49%で、法定雇用率(1.8%)を下回る企業の割合は全体の55.7%。長引く不況で中小を中心に採用を手控えていることも大きい。